

## 室町期の少弐氏と朝鮮

伊藤幸司(九州大学)

### 00.はじめに

・ いまだ全容が考察されていない「巨酋」少弐氏の朝鮮通交

伊東亜希子 2021 「少弐氏と朝鮮通交——五世紀前半の動向を中心に——」『日本歴史』874

伊東亜希子 2021 「一五世紀前半における少弐氏の朝鮮通交——室町幕府対立期における少弐氏と宗氏の関係を中心に——」『人間文化創成科学論叢』23

本報告では、「長い室町期」ということで、いわゆる戦国期まで視野に入れる

### 01.朝鮮からみた少弐氏

・ 朝鮮国王使が来日したときの贈物 (別紙参照)

・ 『海東諸国紀』朝聘応接紀・諸使定例条  
諸使を館待するに四例有り。国王使を一例と為す。諸巨酋使を一例と為す。〈日本畠山・細川・左武衛・京極・山名・大内・小二等を巨酋と為す。〉九州節度使と対馬宗氏特送を一例と為す。諸酋使と対馬島人の受職人を一例と為す。

・ 『海東諸国紀』「日本国西海道九州之図」  
「小二殿」「千葉殿」「節度使」「大友殿」「菊池殿」「大内殿」

### 02.なぜ、朝鮮は少弐氏を「巨酋」として認識し、重要と考えたのか？

・ 朝鮮をめぐる東アジア情勢

高麗末期以来の倭寇問題 [中村 1965、1969] [田中 1959]

沿岸防備体制

倭寇禁圧要請 → 室町将軍、九州探題、九州の有力者

倭寇懐柔政策 経済的利益を供与 → 倭寇から平和な通交者へ  
向化倭人 (投化倭人) … 自己の意志で朝鮮に帰化した倭人

このうち朝鮮の官職を下賜 (授職) された者を受職人という

使送倭人… 日本から朝鮮に使者を派遣する人

興利倭人… 日本から朝鮮に商売しに行く人

15 世紀前半の世宗の対日通交統制策 → 有力者のみ優遇

文引の制…対馬島主宗氏の発給する文引（渡航証明書）を持たない日本人  
通交者を朝鮮は接待しない

図書の導入…有力者に図書（銅印）を下賜して、朝鮮通交する際に書契（外  
交文書）に押印された印面で真偽を判断 → 受図書人

歳遣船定約…1 年間に派遣することができる貿易船数を通交者ごとに決定  
受職人でありながら日本に帰国した者は朝鮮に来朝できる通交権をもつ

### 03.少弐氏の朝鮮通交と宗貞茂

#### ・少弐氏の朝鮮通交の初見

『太宗実録』2 年（1402）5 月癸未条

賜對馬島守護宗貞茂土物、就付使人以送、人蔘二十斤・黑麻布三匹・白苧布三匹・  
米四十石・豆二十石、又賜宗和殿宗九郎・宗五郎・小二殿等使人米豆各十石・松子  
各二石・虎皮各一張、時貞茂獻禮物故也、

→ 少弐貞頼の朝鮮通交

筑前守護に還補、応永 8 年（1401）より九州探題渋川満頼のもとで活動

応永 6 年（1399）～9 年（1402）宗貞茂が筑前守護代となり、宗氏一族が  
豊前・筑前・肥前で軍事行動を展開「少弐・宗体制」〔佐伯 1978〕

対馬宗氏一族とともに通交。

宗貞茂が存命中の少弐氏の朝鮮通交は、貞茂に依拠した通交が基本。

「少弐氏はこの貞頼期の応永九年、初めて朝鮮に遣使し渋川満頼が盛んに行  
っていた朝鮮通交においても競合する意志のあることを明らかにした」

〔本多 1988:32 頁〕

→ 少弐貞頼の通交途絶

応永 11 年（1404）少弐氏と九州探題渋川氏との抗争再開、貞頼の死去

応永 15 年（1408）宗貞茂の帰島、「少弐・宗体制」瓦解

#### ・少弐満貞の使者が朝鮮国王との対面をおねだり

『太宗実録』13 年（1413）6 月戊午条

引見日本小二殿使僧慶勝・大護軍平道全啓曰、今來小二殿使僧慶勝曰、去十一日、  
上欲坐殿受朝、令僧亦與焉、僧喜甚、其日以雨不果、僧未覩耿光、明日將還、心有  
歉然、上聞之、使人問於成石璘・河崙、皆對曰、皇帝君臨天下、四夷來王、未不見  
之、今見倭僧、無所不可、趙英茂曰、是雖無妨、然非國王之使、且彼醜夷、不必見  
也、上從石璘等議、

→ 少弐氏の使者慶勝が対馬の平道全を介して朝鮮国王との対面を要請

・仏具の求請

『太宗実録』13年（1413）6月戊午条  
送大蔵経于日本国筑州藤公、従其請也、

『世宗実録』10年（1428）7月庚申条  
九州少弐藤満貞、遣人献土物、仍求大般若経、答云、貴国諸鎮、求去殆盡、未得塞請、回賜正布三百八匹、

・暴動を起こす

『太宗実録』14年（1414）6月己巳条  
筑州太宰府司馬少卿藤源満眞使人獻禮物、求梵鍾、請還左衛門、

『太宗実録』14年（1414）8月丁未条  
遣倭池温、往諭宗貞茂、對馬島宗貞茂使人三十四名・小二殿三十一名・一岐州二十名・日向州二十名、共一百五名、俱在蔚山、怒請鍾遲緩給付、拔劍欲害郡人、恣行暴亂、監司具聞、上欲拘留、召政府六曹議之、禮曹判書黃喜獻計曰、遣平道全、以大義責之曰、國家待爾甚厚、爾曹反不感德、以小事銜之、欲害我民、交隣之道若是乎、爾等若求大鍾、則告于國家可也、何悖慢無禮如是其甚耶、遂賜他鍾、脅令入送、且遣池温、諭宗貞茂曰、今後日本國王及對馬島・大内殿・小二殿・九州節度使等十處倭使外、各處倭人、毋得出送、上從之、

→ 大宰少弐=都督司馬、大宰少弐=都督少卿、唐名での呼称

・室町幕府への贈物

『後鑑』卷129・応永24年（1417）12月3日条・足利義持御内書写  
鳥目万疋・座氈二枚・麝香皮一枚到来了、神妙候、太刀一腰・馬一疋黒駁遣之候也、  
十二月三日  
太宰少弐殿

→ 史料としては残っていないが、座氈や麝香皮は朝鮮から入手した可能性がある。ただし、こうした文物は博多の市場でも入手できたであろう。

## 04.応永の外寇と少弐氏

・ 応永 26 年 (1419) 6 月、応永の外寇 (己亥東征)

朝鮮が倭寇の巢窟とみなした対馬を、227 艘 17、285 人の軍勢で攻撃した事件。6 月 20 日以降、対馬中部の宗湾周辺で合戦がおこなわれ、対馬島主宗貞盛に 7 月は風変があるので留まらない方が良くと撤退を求めた結果、7 月 3 日以前に朝鮮軍は撤退した。この事件は、蒙古襲来の記憶と神国思想の高揚を室町日本社会にもたらし

『満濟准后日記』 応永 26 年 (1419) 8 月 7 日条  
しばらく御雑談の最中、九州小弐方より飛脚注進あり、伊勢因幡入道御前においてこれを読む。その状にいわく、蒙古舟先陣五百余艘、対馬津に押し寄せ、小弐代宗右衛門以下七百余騎馳せ向かい、度々合戦す。ここに六月二十六日終日相戦う、異国の者どもことごとく打ち負け、当座において大略打ち死に、あるいは、召し取ると云々、異国大将兩人生け捕り、種々白状これありと云々、この五百余艘はことごとく高麗国の者なりと云々、唐船二万余艘、六月六日日本の地に着かしむべき処、件の日大風起り、唐船ことごとく口帰り、過半は海に没する由、注進これある旨、かの生け取る大将高麗人白状の由、同じくこれを注進す、およそこの合戦の間、種々奇瑞これありと云々、

『老松堂日本行録』 110 節 (於京都)・(1420 年 4 月) 二十三日深修庵に懷を書す (前略) 外郎我に言いて曰く、「去々年皇帝 (永楽帝) の使臣内官呂淵兵庫に來り、皇帝の語を以て御所 (足利義持) に向い言いて曰く、『汝の父 (足利義満) および朝鮮王□□□皆我に事う。汝 (義持) 独り事えず。予 (永楽帝)、將を遣わし朝鮮と同に行兵せん、汝は乃ち城を高くし池を深くしてこれを待て』と。御所聞きて怒り、其の使を入見せず、海賊をしてこれを殺さしむ。適たま風順にして海賊呂淵に及ばず、還りて入歸するなり。去年六月、朝鮮の兵船対馬島に到る。小二殿、御所に報告して曰く、『江南の兵船一千、朝鮮の兵船三百隻、本国に向かいて來る。吾れ力戦してこれを却く』と。御所これを聞き、乃ち小二殿に多く賞物を送り、朝鮮に向かい甚だ焉を怒る。(後略)」と。(後略)

→ 少弐満貞が自分の奮戦をアピールするような報告を室町幕府にする

・ 日本社会で飛び交った流言飛語をめぐって

→ 応永の外寇をめぐる国際情勢 [佐伯 2010]  
足利義持による日明断交  
明使呂淵が来航、永楽帝の怒りを伝達 (上記の『老松堂日本行録』参照)  
兵庫への琉球船の来航 (明使は琉球経由で来航の可能性?)

南九州への南蛮船来航

- 応永の外寇と地震〔伊藤 2009〕  
5月9日夜丑刻に地震発生

・1420年の朝鮮国王使宋希璟と少弐満貞

『老松堂日本行録』184～186節（於博多）・（1420年8月）6～13日条

- 別紙参照

『世宗実録』2年（1420）10月癸卯条

日本国回礼使通事尹仁甫、先来復命啓曰、（中略）九州節度使父子、誠心迎待、筑前州守藤満貞・一岐島主、皆有怨言、小二殿亦曰、去年、朝鮮来攻我对馬島、我欲請兵船二三百、攻破朝鮮沿海数邑、然後、快於心矣、对馬島都都熊瓦弟熊守亦曰、吾欲拘汝等、以当島人之被留者、然与本国通好、不敢耳、其被留人、須速刷還、

- 对馬島を攻撃された事への怒りと報復の可能性  
对馬・壹岐の領主としての自己認識

・1423年の少弐満貞の朝鮮通交

『世宗実録』5年（1423）9月壬寅条

日本國筑前州太守藤源満貞及其幕下備州刺史砥上大藏氏種、左衛門大郎等使人獻土物、満貞奉書于禮曹曰、本朝行聘於貴國、答聘之專价、四月四日到石城之津、遂枉驪駕於宰府之私第、賜書告以官船護送之事、豈敢不奉命哉、官船歸朝之日、可致謝答之忱焉、先奉書并方物、聊申海路無恙之慶耳、下情得備達明聞則是幸、硫黃二千五百斤・丹木四千五百斤・青磁盆七十箇・白磁碗大小二十箇・良香十三斤・陳皮十六斤・丁香皮六十五斤・硯二枚・金畫手篋一箇・火筋二雙・倚箱一箇・付太箱火筋二雙・佩刀五腰・銅一百五十斤、

禮曹參議成概答書曰、所獻禮物、謹已收納、并諭回禮使船到石城之津、撥官船護送、爲感爲謝、今將土宜正布一千六百五十匹表意、惟不腆是愧、

大藏氏種奉書于禮曹曰、僕聞貴國風化之美、而眷慮不已者久矣、然寡君使與謀本州大小之政事、夙夜靡遑寧處、以故未能循禮問、獻愚懇、千里之外、徒馳仰而已、方今寡君行聘於貴國、僕固所願也、不腆土宜、丹木四百斤・硫黃四百斤・長刀四把・藿香八斤・錫二十七斤・朱碗七十箇・佩刀四腰表誠、

禮曹佐郎成念祖答書曰、能從太守、輸誠修好、良用爲喜、所獻禮物、轉啓收納、仍將土宜正布一百五十匹、就付回价、（後略）

- 朝鮮国王使朴熙中が往路で少弐満貞の大宰府私邸を訪問して護送を依頼

朝鮮側が少弐氏の実力を評価して良好な関係を構築しようとした  
この時、朝鮮国王使が少弐氏にもたらした贈物が、以後の先例となる（『世宗実録』6年（1424）正月丙戌条）

#### ・1424年の少弐満貞の朝鮮通交

『世宗実録』6年（1424）8月癸亥条  
日本國大宰府宗右馬近江守茂世使人獻土宜、  
筑州刺史藤源満貞使人、獻金襴一段・羅一段・光絹二匹・生絹十匹・摺扇一百把・  
檳榔子一十觔・土黄二十筒・胡椒一十觔・犀角二頭・朱盤大小四十片・銅五百觔・  
蘇枋一百五十觔・紅絹一段・大刀十把・黄丹五觔、回賜正布五百五十匹、

→ 唐物・南島・南蛮・日本産の物産を貿易品として活用

### 05.少弐満貞をめぐる北部九州の争乱と朝鮮通交

#### ・対馬と北部九州の動向

1425年4月：少弐満貞・菊池兼朝が蜂起して九州探題渋川義俊を博多から駆逐  
1425年10月：幕命を奉じた大内盛見が少弐・菊池を鎮圧  
1426年：少弐氏・宗氏と渋川氏・大内氏の対立は一時的に緩和  
1427年：少弐勢と大内勢との合戦、宗貞盛も筑前出兵  
1428年11月以前：少弐満貞は肥後菊池氏のもとに逃亡  
1429年：大内盛見の上洛の際に少弐満貞・菊池持朝が再蜂起  
1430年：筑前国は幕府料国へ、大内盛見が代官  
1431年：大友持直も反大内方へ  
1431年6月：大内盛見討死  
1431年11月：少弐満貞・大友持直と大内持世・菊池持朝・大友親綱が衝突  
1432年3月頃：宗貞盛が筑前渡海、博多掌握  
1433年3月：大内持世は幕府から「大友・少弐治罰御教書」「御旗」を獲得  
1433年8月：少弐満貞・資嗣父子討死  
1434年2月：少弐・大友勢が蜂起、宗茂直が博多支配  
1436年：少弐嘉頼が対馬逃亡  
1440年：大内持世が少弐嘉頼の赦免を幕府に働きかけ、少弐氏が筑前守護に  
1440年8月頃：宗盛国が博多統治  
1441年春：少弐嘉頼死去  
1441年6月：嘉吉の変で大内持世が死去、少弐教頼が対馬から筑前侵攻  
1442年6月：少弐教頼は敗れて兵卒とともに対馬へ

- 1443 年：少弐教頼は対馬から筑前侵攻
- 1445 年：少弐教頼が筑前守護に還補、宗盛家が博多統治
- 1446 年 9 月：この頃まで少弐氏と大内氏との抗争続く
- 1447 年頃：大内教弘が筑前守護に補任

#### ・ 1428 年の少弐満貞の朝鮮通交

『世宗実録』10 年（1428）10 月甲辰条

筑前州大宰少弐藤原満貞、致書礼曹曰、迺来寇敵侵弊邑、挈我僚属、屯于他邦、我殿下春月即世、弟乃嗣位、欲啓其賀志、而力微無及、若得荷貴国産物之貺、将遂其薄礼也、仍献太刀・鎧、浅黄糸等物、答書、回賜米一百石・白細苧布・黒細苧布・白細綿紬各十匹・雑彩花席十張・虎豹皮各二張・焼酒三十瓶、

- 足利義持の後継者として義教が決まったことを報告し、その賀志のための文物下賜を要請（方便〔伊東 2021〕）、筑前を追われていることを明示、反幕府
- 朝鮮の少弐氏への対応は変化せず（『世宗実録』10 年 11 月甲戌条）

※争乱のさなかでも、おそらくは対馬宗氏の協力を得て朝鮮通交を展開か

※少弐満貞：永享 5 年（1433）8 月 19 日、大内持世の軍勢により、筑前国秋月城で少弐満貞・小法師丸ら父子 3 人が討死、以後、彼ら名義の通交は途絶

## 06. 少弐氏名義通交権の偽使化

#### ・ 対馬と北部九州の動向

- 1462 年：対馬勢渡海、敗退して対馬に逃亡
- 1465 年 9 月：宗成職の斡旋で少弐教頼が筑前守護に
- 1466 年 11 月以前：宗成職と少弐教頼は地区全国内に一定の実効支配
- 1467 年：応仁の乱勃発
- 1468 年 12 月：少弐教頼と守護代の宗盛直が討死
- 1469 年 7 月：宗貞国が少弐頼忠を奉じて筑前出兵
- 1471 年春：宗貞国が対馬帰島、少弐頼忠との不和
- 1478 年：宗貞国と大内政弘とが和睦、少弐政資（頼忠・政尚）は肥前国に退去

#### ・ 対馬滞在中の少弐教頼の朝鮮通交

宗貞盛の使者・頼沙文が、少弐氏が負けてその兵卒 5、000 余人が対馬島に居留し

ていることを朝鮮に伝えると、朝鮮側は対馬で飢饉が起きた際、彼らが倭寇化することを懸念（『世宗実録』24年（1442）6月甲辰条）

#### 1447年の少弐教頼の朝鮮通交

→ 約17年ぶりに少弐氏名義の通交再開（『世宗実録』29年10月甲申条）

加珍老・吾羅灑毛を派遣

宗貞盛所遣吾羅灑毛等十七人、吾郎哈指揮仇赤甫下等七人隨班獻土物（『世宗実録』25年（1443）2月丁酉条）

この頃、少弐氏が大内氏支配下の博多を焼き討ち（『世宗実録』30年3月丁酉条）

#### 少弐氏の慶弔外交

→ 1453年5月に、文宗が死去した際に、宗成職等とともに使者を派遣して景禧殿で進香させている（『端宗実録』元年5月丁巳条）、「日本国筑前州太宰府藤原教頼」という自称にも注目

1469年6月、世祖が死去した際に、永昌殿で進香させている（『睿宗実録』元年6月戊辰条）

### ・宗成職の大規模な偽使派遣政策

1443年の癸亥約条、対馬島主歳遣船50船、ただし島主特送船などは数外、北部九州の所領喪失

1452年6月22日に宗貞盛死去、宗成職が対馬島主に

歳遣船を超過して派遣 → 特送船等も50船に含めて50船を遵守せよ

深处倭名義の偽使の創出〔長 2002〕

博多商人と協調して偽巨曾使を創出〔橋本 2005〕

※偽使とは、ある人間（実在しない架空の人物でもよい）の名義を騙って第三者が外交使節を仕立て上げ、外国に通交して貿易利潤を獲得する現象・存在のこと〔橋本 2005〕

#### 少弐教頼の朝鮮通交の同行者

→ 宇久源勝、志佐源義、神田源徳、呼子源高、真弓源永は深处倭名義の偽使通交権の具体例として指摘〔長 2002〕

→ 大内教之、京極生観、矢田忠重も偽使〔橋本 2005〕〔伊藤 2009〕

※大規模な偽使派遣の時代において、巨曾使である少弐氏名義の偽使も相応に対馬勢力によって派遣されていた可能性が高い。とりわけ、少弐氏が筑前で軍事活動中は、対馬勢力に名義通交を委ねていたであろうから、その可能性はよ



り高まる。あるいは、少弐氏と宗氏との間で、通交名義の使用にあたって何らかの取り決めがあった可能性もある。cf.牧山氏・塩津留氏の名義契約の事例〔長1987〕

#### ・少弐頼忠と少弐政尚の使送の矛盾

1473年8月「日本国筑前州太宰府都督司馬少卿頼忠」名義の使者が朝鮮通交  
1473年8月「日本国関西路筑豊肥三州総太守太宰府都督司馬少卿藤原政尚」名義の使者が朝鮮通交

→ 応仁2年(1469)筑前国で少弐教頼が死去、頼忠が家督を継承。文明2年(1470)10月から文明3年(1471)9月23日の間に、足利義尚の偏諱を受けて政尚と改名。文明10年(1478)10月から文明11年(1479)11月19日の間に政資と再改名〔佐伯1978〕。明応6年(1497)4月19日死去。

### 07.偽少弐殿使の展開

#### ・少弐氏と宗氏の決裂

文明10年(1478)、少弐氏と対馬宗氏との関係は断絶、少弐氏は筑前を放棄して肥前へ、少弐氏名義の朝鮮通交は、完全に宗氏によって偽使化

#### ・三浦の乱後の対馬宗氏による通交権復活交渉と偽少弐殿使

1510年、三浦の乱、対馬勢力のすべての通交権権益がリセット

1511年、第1回請和交渉、偽日本国王使、偽大内書契 → 深処倭名義 OK

1512年、第2回請和交渉、偽日本国王使、対馬宗氏特送船、偽大内殿使、偽少弐殿使 → 壬申約定締結

『中宗実録』7年(1512)2月庚寅条

(前略) 弼中云、小二殿巨酋、非諸酋比、且不与对馬島叛乱、(後略)

#### ・少弐「政尚」図書はいつ対馬の手に渡ったのか?

『中宗実録』7年(1512)閏5月辛巳条

(前略) 楊震曰、臣聞向化倭人雪明之言、(中略) 且往年雪明之弟到此語曰、小二殿於甲午年為大内殿所合并、其時馬島人偷取図書、仮托小二殿、至今往来云、雪明欲將此事啓達、而其弟強請止曰、憑此図書又更出来、則可復見兄云、故敢啓達、且云、諸島図書年久、或経百年、転相借用(後略)

- 甲午年とはいつか? = 1474年 (文明6年)
- 「この発言の真偽は不明で、とくに「甲午年」という年には疑問がある。九州側の史料には、この年、少弐氏と大内氏のあいだで大きな事件が起きた形跡がない。あるいは、文明十年(1478)に少弐政資が大内政弘に敗れて大宰府から追われた事件、もしくは明応六年(1497)に政資父子が大内義興に敗れて死んだ事件を指すのかもしれない。」〔村井1997:295〕
- 九州国立博物館蔵の宗家旧蔵の図書と木印のなかに「政尚」図書がある
  - 「政尚」図書：タテ 49mm × ヨコ 46mm、324g、他の図書より一廻り大きい (巨曾使だからか?)
  - 「政尚」木印：タテ 49mm × ヨコ 46mm 〔田代・米谷1995〕
  - 図書を模して木印を制作、「政尚」名義通交權益を複数人が所持していた?
- 少弐政尚名義の通交權益を保持していた有力候補者として尾崎早田氏がいる〔村井1997〕

#### ・少弐殿使と武衛殿使

『明宗実録』7年(1552)6月己卯条

諫院啓曰、倭奴性本奸狡、唯知欺詐取利、而不知信義之爲何物、(中略)頃者日本國王使臣副官、或爲大内殿上官、或爲畠山殿上官而來、當時固已疑之、以謂對馬島倭、竊取符驗而來、欺誣我國、而專其利也、及今武衛殿所送宜春西堂、乃小二殿使送春江西堂、逐年來我國者也、畠山・武衛不通我國、皆近百年、而相繼出來、且小二與武衛、相距不邇、必無以他島之人爲上官、使送之理、況禮曹郎廳詰問之時、言辭倒錯、欺詐無疑。國家若不知其詐則已矣、既知其詐、則決不可接待、請嚴辭還送、使其知其罪、自今以後、爲他島使送來者、雖有圖書・符驗、一切勿接、武衛殿率來譯官、若知其爲春江西堂、則當告鎮將、具由啓聞、使朝廷預知而察之可也、利其上來、到京後、始告禮曹、至爲駭愕、請下禁府推鞠、(後略)

- 武衛殿(京都の渋川氏)の使者・宜春西堂は、かつて中宗38年(1543)に少弐殿の使者・春江西堂として朝鮮通交していたのが朝鮮側に露見〔伊藤2002〕

『中宗実録』28年(1533)7月乙卯条

禮曹啓曰、日本國小二殿使送藤朝秋、壬辰年五月二十一日入京、是年八月初七日還發程、是年九月十二日離浦、自浦到其國、二十日程途云、故給其糧料、而送之、今年所持來文書、乃出於壬辰年九月、則中間詐稱明白、我國漂流來還者亦云、中間造作印信之事、朝廷皆知之矣、此人所爲姦詐、請勿接待、(後略)

- 「壬辰年」=前年(1532)

『中宗実録』30年（1535）2月癸丑条

（前略）況聞今之稱為国王・大内・小二・諸巨酋之使而來者、皆是中間詐偽、我国通信之挙、其奸必露、（後略）

『中宗実録』39年（1544）4月乙酉条

（前略）凡所為国王使臣・大内・小二使送諸倭、皆對馬之倭、君子可欺以其方、当受其欺矣、其实則如此也、（後略）

・「政尚」 図書から「政忠」 図書へ

『明宗実録』4年（1549）3月戊寅条

礼曹啓曰、小二殿書政尚契言、年老請以嗣子政忠改図書、而考諸海東記及曹騰録、則政尚自祖父通好不絶、但聞政尚年已九十七歳云、其生存与否、未可詳知、然自宗朝、世遣不絶、今無拒絕之義、可從其請、改給図書、以答遠人之望、答曰、有前例、則可從、然以此意収議于大臣、

- 少弐「政尚」が97歳と高齢なので、子息の「政忠」に図書を改給したいと請願  
実際の少弐政尚は、1441年生まれ、1479年に政尚から政資に改名し、1497年に肥前で死去している。子息には、頼隆、高経、資元がいる。
- 偽少弐殿使は毎年派遣「小二殿頃来馬島、世輸忠款、信使不絶、故或給銅符、或賜図書」（『明宗実録』5年（1550）9月癸卯条）

『明宗実録』21年（1566）3月己酉条

日本国小二殿政忠、遣使進香于文徳殿、

- 慶弔外交は、朝鮮の歡心を必ず買うことができる行為  
明宗元年（1546）には、偽日本国王使と偽少弐殿使いが、両大王（中宗・仁宗）の喪のために進香に訪れている（『明宗実録』元年10月丙戌、11月乙卯条）

## 08.おわりに

1590年、宗義智よしとしらの画策によって150年ぶりに朝鮮通信使が来日した。通信使は豊臣秀吉の天下統一を祝賀する目的で渡海したもので、前年に派遣された偽日本国王使（正使・景轍玄蘇、副使・宗義智）に導かれた「回答使」であった。黄允吉・金誠一ら通信使一行は、豊臣秀吉への礼物のほか、京極・細川など畿内「諸殿」の

六氏、および少弐氏・大内氏などへの礼物を携え、彼らの接待に備えていた。しかし少弐氏や大内氏の領域を通過しても、接待の使者を出す様子もなく、不信の念をつのらせて京都にのぼった彼らのもとに、初めて衝撃的な事実がもたらされた。すなわち「及到貴国、則右等諸殿、無一人存者」「夫周防大内、西海之小二殿亦通聘于我国、而最親且旧者也、……………存都之日諸僧皆言、二殿亡滅已久」といった、戦国時代後の日本の現実に直面するのである。毛利輝元や小早川隆景なる者が、大内・少弐両氏の旧領を治めていることを耳にした一行は、先導していた外交僧玄蘇に質すと、輝元は大内氏、隆景は少弐氏と同姓で、各々居住地にちなんで、毛利・小早川と称しているのである、といった苦しい答弁がかえってきた。〔田代・米谷 1995:94-95 を一部改変〕

### 〔引用文献〕

- 荒木和憲 2007 『中世対馬宗氏領国と朝鮮』 山川出版社  
荒木和憲 2017 『対馬宗氏の中世史』 吉川弘文館  
荒木和憲 2021 「室町期北部九州政治史の展開と特質」 『日本史研究』 712  
伊藤幸司 2002 「中世後期における対馬宗氏の外交僧」 『年報朝鮮学』 8  
伊藤幸司 2009 「応永の外寇をめぐる怪異現象」  
北島万次ほか編 『日朝交流と相克の歴史』 校倉書房  
伊藤幸司 2009 「偽大内殿使考—大内氏の朝鮮通交と偽使問題—」 『日本歴史』 731  
伊藤幸司 2021 『中世の博多とアジア』 勉誠出版  
長節子 1987 『中世日朝関係と対馬』 吉川弘文館  
長節子 2002 『中世 国境海域の倭と朝鮮』 吉川弘文館  
佐伯弘次 1978 「大内氏の筑前国支配」 川添昭二編 『九州中世史研究』 1、文献出版  
佐伯弘次 2010 「応永の外寇と東アジア」 『史淵』 147  
須田牧子 2011 『中世日朝関係と大内氏』 東京大学出版会  
田代和生・米谷均 1995 「宗家旧蔵「図書」と木印」 『朝鮮学報』 56  
田中健夫 1959 『中世海外交渉史の研究』 東京大学出版会  
中村栄孝 1965 『日鮮関係史の研究』 上巻、吉川弘文館  
中村栄孝 1969 『日鮮関係史の研究』 下巻、吉川弘文館  
橋本雄 2005 『中世日本の国際関係』 吉川弘文館  
本多美穂 1988 「室町時代における少弐氏の動向」 『九州史学』 91  
松尾弘毅 2023 『中世玄界灘地域の朝鮮通交』 九州大学出版会  
村井章介 1997 『国境を超えて—東アジア海域世界の中世—』 校倉書房

表5 朝鮮国王使發遣に伴う諸氏への贈物

發遣年	使節名	対象	贈品
1422	朴熙中	源義俊・藤原満貞・宗貞盛	— (1424年の時と同じ)
1424	朴安臣	九州前都元帥源道鎮 筑前州太宰府少卿藤原満貞 対馬州左衛門大郎 大内殿多多良公 九州都元帥将監源義俊 対馬州守護宗公 故宗貞茂妻子	綿紬5匹・苧布5匹・彩花席10張・豹皮1領・虎皮2領 綿紬5匹・白苧布5匹・雑彩花席10張・豹皮1領・虎皮2領 正布310匹・苧布5匹・焼酒30瓶 綿紬5匹・苧布5匹・彩花席10張・豹皮1領・虎皮2領 綿紬5匹・苧布5匹・彩花席10張・豹皮1領・虎皮2領 綿布10匹・糙米30石 綿紬10匹・造米50石
1428	朴瑞生	対馬島宗貞盛 (対馬島)左衛門大郎 九州西府少貳藤公 九州都元帥源公 一岐州志佐源公 (一岐州)佐志 大内多多良持世	白細綿紬3匹・白細苧布3匹・雑彩花席5張・米20石 白細苧布5匹・焼酒30瓶 白細綿紬5匹・白細苧布5匹・彩花席10張・豹皮1領・虎皮2領 白細綿紬5匹・白細苧布5匹・彩花席10張・豹皮1領・虎皮2領 白細綿紬5匹・白細苧布5匹・雑彩花席10張 白細綿紬5匹・白細苧布5匹・雑彩花席10張 白細綿紬10匹・白細苧布10匹・彩花席15張・豹皮2領・虎皮4領
1432	李芸	大内多多良公 九州都元帥源公 関西道大友源公 左武衛源公 西海路壱岐州太守佐志平公 対馬州右馬助宗貞澄 対馬州太守宗貞盛	白細綿紬10匹・白細苧布10匹・雑彩花席15張・豹皮2領・虎皮4領 白細綿紬5匹・白細苧布5匹・彩花席10張・豹皮1領・虎皮2領 白細綿紬5匹・白細苧布5匹・雑彩花席10張・豹皮1領・虎皮2領 白細綿紬15匹・黒細麻布15匹・雑彩花席15張・豹皮2領・虎皮4領 白細綿紬5匹・白細苧布5匹・雑彩花席10張 白細綿紬3匹・白細苧布3匹・雑彩花席5張 白細綿紬5匹・白細苧布5匹・雑彩花席10張
1439	高得宗	— *防長豊筑四州通守修理大夫 多多良持世・管領京兆大夫源 持之が礼曹に復書	—
1443	卞孝文	大内殿 九州西府少二 左武衛 関西道大友 本国管領 対馬州太守 一岐州佐志 九州松浦志佐	白細綿紬10匹・白細苧布10匹・雑彩花席15張・豹皮3領・虎皮4領ほか — — — — — —
發遣年	使節名	対象	贈品
1459	宋処俊	大内多多良公 大和守 畠山修理大夫源公 左武衛源公 管領 京極佐佐木氏大膳大夫源公 関西道大友源公 対馬州太守宗公 肥前州松浦一岐州太守志左源公 一岐州佐志源公	白細綿紬10匹・白細苧布10匹・黒細麻布10匹・辺児寝席15張・豹皮2領・虎皮4領ほか 白細綿紬5匹・白細苧布5匹・黒細麻布5匹・辺児寝席10張・豹皮1領・虎皮2領 白細綿紬10匹・黒細麻布10匹・彩花席10張・豹皮1領・虎皮2領 白細綿紬15匹・黒細麻布15匹・辺児寝席15張・豹皮2領・虎皮4領 白細綿紬10匹・白細苧布10匹・黒細麻布10匹・辺児寝席15張・豹皮2領・虎皮4領 白細綿紬10匹・黒細麻布10匹・彩花席10張・豹皮1領・虎皮2領 白細綿紬5匹・白細苧布5匹・辺児寝席10張 白細綿紬5匹・白細苧布5匹・黒細麻布5匹・辺児寝席10張・豹皮4領ほか 白細綿紬5匹・白細苧布5匹・辺児寝席10張 白細綿紬5匹・白細苧布5匹・辺児寝席10張